

秋から冬にかけて、公園などの枯れた芝生には盛り上がった新しい土山が点々と広がっているのを見かけます。これはモグラ塚といって地下生活をしているモグラがトンネル工事によって掘り出した土を地上まで押し上げたものです。神奈川県内の平地で普通に見られるモグラ塚は、アズマモグラという体長15cmほどのモグラがせっせと働き、造りだしたものです。アズマモグラの寸胴型で短い尾、シャベル状の外に向いた巨大な前肢はまさにトンネルを掘るのに適した体型です。地下生活をしているために、直接モグラを観察することはできませんが、私達と最も身近に生息している哺乳類と言えるでしょう。

県内には、この身近なアズマモグラの他に、ヒメヒミズとヒミズと言う小形で原始的なモグラが生息しています。ここでは丹沢山塊を中心に、私達と最も離れた環境で、細々と生息するヒメヒミズとヒミズの関係について紹介します。

小さなモグラ ヒメヒミズとヒミズ

ヒメヒミズとヒミズは大変よく似ています。どちらも小形で全身黒色のピロード状の体毛には金属的な光沢が見られます。また、土を掘る手のひらの面積は体に比べ小さく、反対に尾は長く、中央部が太いバット状をしています。しかし、ヒメヒミズは、その名前が示すとおりヒミズより体が細く、小さいことが特徴です。また、頭骨を比較すると、ヒメヒミズでは上顎犬歯の先端が幅広くなっていること、下顎前臼歯が1対多い特徴で区別することができます。



ヒミズ。

ヒミズは本州、四国、九州に分布する他、五島列島、対馬、隠岐諸島、山口県見島、淡路島、小豆島などの島々まで広く分布し、山地では極めて普通に生息しています。県内では丹沢山塊をはじめ大磯丘陵、多摩丘陵そして三浦半島にいたる平野部の僅かに残る自然林でも生息が確認されています。

一方、ヒメヒミズは、本州では北アルプス、木曾御嶽山、中央アルプス、八ヶ岳、尾瀬沼、塩原、蔵王、十和田湖、早池峰山など、四国では剣山、九州では祖母山、九重山系などで生息が報告されています。県内では丹沢山塊の主峰蛭ヶ岳、檜洞丸、犬越路の三箇所です。

一般的には、本州中部地方の1500m以上の高標高地にはヒメヒミズが生息し、それ以下にヒミズが生息するという傾向が見られます。しかし、日本で唯一、富士山山麓の青木ヶ原付近の熔岩地帯では800m程度の低い所にもヒメヒミズが住んでいます。

日本固有属固有種とされるヒミズとヒメヒミズは系統的にも近縁で、体の大きさも余り差がありません。そのため両種間では高標高地、低地と地理的にすみ場所を違えるなど棲み分けているように見えますが、実は地域によっては激しい競合が見られるのです。

丹沢山塊のヒメヒミズは何処へ

モグラ類のなかで、体の特徴が最も原始的なヒメヒミズは、その昔、低地から山地まで広く分布していたと思われます。後に日本へ進入してきたヒミズなどモグラ類によって駆逐、圧迫され、次第に高標高地に追い詰められ、遺存的な分布をしているのでしょう。

今では亜高山から高山帯の動物と言われていますが、実はヒミズが進入しにくい岩礫地など限定された悪条件の地にやむなく生息しているのです。

丹沢山塊でヒメヒミズの生息が確認された地域はいずれも山頂です。これ以上標高の高い場所はなく、勢力の

強いヒミズとの威力競合によって移動したくても、ヒメヒミズには移動する場所がありません。もし、丹沢山塊に熔岩あるいは高山帯に見られる岩礫地のような環境が存在するならば、丹沢山塊のヒメヒミズ個体群は残存することができるでしょうが、それも不可能です。丹沢山塊からヒメヒミズが絶滅することは確かです。いや、すでに絶滅しているかもしれません。

今から20年ほど前に丹沢山塊を中心にヒメヒミズの分布調査を実施しました。ヒミズやヒメヒミズは大麦やピーナツバターを餌にしたネズミ捕り用ワナで容易に採集ができます。丹沢山塊でヒメヒミズが生息していると思われる16箇所を選び、ワナを用いた、積極的に生息を確認するための調査でした。その結果、蛭ヶ岳山頂付近でヒメヒミズは雌2個体、ヒミズは雄5個体と雌1個体の計6個体を採集しました。また、檜洞丸山頂付近ではヒメヒミズは雄2個体と雌1個体の計3個体、ヒミズは雄6個体と雌10個体の計16個体を採集しました。両地域ともヒミズとヒメヒミズの捕獲率から推定できるように蛭ヶ岳山頂付近も檜洞丸山頂付近も、すでにヒミズの勢力下になっており、その中で細々とヒメヒミズが混在している状況だったからです。



ヒメヒミズの分布。